

No.155

全 仏

3/45.



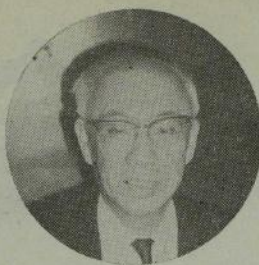
横浜市 三宝寺 (浄土宗)

就任にあたり

— 加盟各団体の御協力を —

全日本佛教会

理事長 稲田稔界



昨年十一月役員の任期満了の際満場一致で理事長に再選された来馬道断師が突然病気のため入院、長期の加療を要するとしてその職を辞された。

ました。理事長の代行を他に依頼してその快復を待つべきが至当かと考え、専心慰留申上げその酬意を願ったのでありますが、その辞意は堅く、かつ責任感のあまり病状に響いてもいかがかと、その御病状の快気を速かならしむことを願ひ、急理理事会の議決により、不肖理事長の重責を荷負うこととなりました。

万国博施設参加の法輪閣建設も完成を遂げ、いよいよ三月十五日から業務を開始をすることとなりましたが、この重要なときに、来馬道断師の退任は、まことに残念至極といわなければなりません。しかし常務理事として在京されますので一日も早く御健康をとりもどされ、よき全仏の理解者として御活躍いただきたいと衷心希うものであります。

総務局長として二年、事務総長として二年余、全仏事務総局に勤めました関係もあり、各加盟団体の御支援と御叱正をいただくよう懇願する次第であります。

全仏が当面する事業については微力ではあります、誠意を以てその責務を果さして頂く決意であります。

先ず法輪閣の運営の問題につきましては、種々の課題に慎重に対処しなければなりません。

六ヶ月間の長期に涉つての運営は、きめこまかな配慮が必要とされますが、要はすべて拙速をやめて巧遅を尊び、機関の決定に順い、財政ながらも最も有効な企画が実施されなければなりません。

大方の御理解と一層の御協力を切望して止みません。

次に本年十月七、八の両日開かれる第十八回全日本仏教徒会議新潟大会であります、参加人員六千名を目的に地元新潟市は勿論、新潟、高田等の重点都市をはじめ、全県一丸の熱意が結集されつつあり、その成功を念ずると共に稔り多い会議とするために努力しなければとあらためて会議の重

要性を痛感するものであります。

また、同じく十月中旬に開催される、世界宗教者平和会議には、日本宗教連盟の加盟団体として協力方が決定され世界各国から幾多の宗教団体の代表が三百余、オブザーバー約四〇、ウイジター約一〇〇名、役員職員等を含めて五百数十名の大人数が京都国際会議場と東京とに十日間の日程で、お互にそれぞれの宗教の本質を理解しあい、そのなかに平和の原理を求め、平和運動を強力に推し進めて、戦争の脅威を取り除くためには、いかに協力提携し、いかに実践していかなければならないかを検討します。

また非武装の問題はもちろんのことですが、宗教団体をも含めて世界の諸団体が、永い苦しい平和運動のすえ、平和のための基礎的な問題であることに気づいた開発および人権などの諸問題についても、そのために何がなされなければならないか、何が出来るか、ということに大きな関心が寄せられています。

平和のために宗教がこれまでよりもっと生命力にみちあふれた、決定的な役割を果すべきであるという期待を宗教によせる人がだんだん多くなりつつあるのですが、そんないま、永年の夢であった「世界宗教者平和会議」が我が国に於て開かれますことは、まことに有意義であり、これが成功のためにこそ一層の努力をかたむけたいと念ずるのであります。

全仏が、加盟団体からの要望は勿論、対外的にもその望みにこたえる事の出来る全仏に成るためたゆまぬ研究と努力を重ねて参りたいと存じます。理事長就任にあたり所懐の一端を申述べさせていただきます。

日本万国博覧会参加無料休憩施設

「法輪閣」が完成

三月十五日よりオープン

いよいよ開幕される日本万国博覧会に参加する法輪閣は、工事を急いでいたが、二月二十八日落慶をみた。大谷光照全仏会長をはじめ、各宗派管長、宗務総長、日本万国博覧会協会、運営で全面協力していただく、全日本煎茶道連盟各流派、関西寺院関係華道各流の方々の参加をみ盛大に行なわれた。

第一部式典には、全仏副会長、真言宗豊山派管長平林有高師導師のもと落慶法要、各界代表の献華会長挨拶、鶴飼建築委員長の経過報告（下段に記）があり、更に施工者金剛組より全仏へ引渡書の贈呈全仏より、関係者の設計者出口正順、中島竜彦両氏、工事監理四天王寺復興建築事務所、施工者金剛組社長金剛利隆氏、工事主任金剛組八木清司氏に対して感謝状および記念品を贈呈、全仏より万博協会に対して引渡書贈呈、同協会より全仏に感謝状の贈呈等が行なわれ、第二部祝宴に入った。

参加協力の煎茶道、華道流派次の通り、
煎茶道

雲井流、松庭流、一茶庵流、東仙流、方円流、二条流、瑞芽庵流、黄檗壳茶流、文房流、松風流（名古屋）、玉泉流、壳茶流、松風流（富山）、

黄檗松風流、薰風流、黄檗松月流、静風流、黄檗弘風流、黄檗花月流、黄檗松香庵花月流、東阿部流、黄檗東本流、黄檗幽茗流、愛茗流、黄檗掬泉流、三彩流、織田流

華道

斑鳩流、池坊、黄檗末生流御室流、岳松御流、小池御流、広円流、光風末生流、高野真流、嵯峨流、誠光末生流、真華流、真養末生流、月輪末生流、常磐末生流、本能寺末生流、卍字流、末生御流、東福寺、末生真光流、都末生流、大和末生流、山村御流、清水流、東山末生流



式 落 慶 真 寫



経過報告

本日ここに当法輪閣の落慶の式典がかくも盛大に挙行されますことは、まことに喜ばしく御同慶の至りに存じます。

さて、当法輪閣の今日に至る経過の御報告を建築委員長として簡単に御報告申し上げます。

わが日本において万国博覧会が開催することに決まりました以来、全日本仏教会では対策機関を設けて研究してまいりましたが、最終的には全国宗務総長会議・理事会等の機関決定を得て施設参加として世紀の万博に対していささか寄与することになりました。万博参加実行委員会を、昭和四十四年一月に発足し準備をすすめ、五月二十一日万博施設参加目論見書を万博協会へ提出し、さらに建築業者および設計者の選定を行ない施工業者として社寺建築の伝統をもつ金剛組に、また設計監理を四天王寺復興事務所出口正順氏、中島竜彦氏に正式依頼しました。

八月十二日午前十一時より法輪閣起工式を挙行工事を引受けられた金剛組では献身的に仕事を進め予定通り工事が進捗し、同年十二月二日に上棟式を行ない、昭和四十五年一月末日完成を見たのであります。

総予算は運営費を含め三千八百十五万四千円ですが、これが資金捻出のため各宗派・団体が積極的に御協力いただいておりますことを御礼申し上げます。

尚、三月十五日から開館する運営面については接待には財団法人全日本煎茶道連盟の三十二流の方々に、生花は関西寺院関係華道各流二十四流の方々の御協力によるものであります。

以上簡単ではございますが、当法輪閣の建設にあたって万博協会御当局をはじめ内外各方面の御協力を心から御礼申上げて御挨拶いたします。

昭和四十五年二月二十八日

全日本仏教会
日本万国博覧会参加実行委員会
建築委員長 鶴 飼 隆 玄

七〇年代仏教界の展望

(下)

B・I・C 主幹 枇 杷 田 義 正

シベリヤを流れて北極海に注いでいる
オビ、エニセイ、ベチヨラ三大河の流れ
を変えて工事が十五カ年計画で進んでい
ることが英国の気象学者ヒューバート・
ラム氏の発表で明らかになった。この河
川の豊かな水をカスピ海やアラル海周辺
のサバク地帯を通して、現在、不毛の広
野を沃地に変えるという壮大な計画であ
る。ところが、この河川の流れが変わる
と北極海に流れ込む水量が半減し、世界
の気候帯が北にせり上がり、地中海域は
北アフリカ並に、米国にも広大なサバク
ができるかも知れぬ、という警告が報道
されている。

問題は段階的に

七〇年代の社会の変革がどのような形
で迫ってくるか、は、現在、教界関係者
の最大の関心事である。だが社会変革と
いうものが、何の前ぶれもなしに突発的
に起こることは殊どないといえるのでは
あるまいか。いま起こりつつある事象が
現在の問題のなかにその要因を孕んでい
るもので、今ある問題を注意深く観察し
ていくとき、七〇年代の社会像は、必ず
やその延長線上に構築されてくることは
歴史が証明している。

六〇年代末に火を吹いた大学紛争の根
も、六〇年代末のときにその芽はあった
ものであるし、もつと掘りさげた観察を
している人口問題研究家は、戦後のベビ
ーブームが大きな原因だとして、七〇年
代社会変革のエネルギーも、そのあたり
にひそんでいると見ているようだ。
彼等は、戦後の資材も設備も乏しいバ
ラックのシシ詰め教室で教育をうけ、な
ぜ自分達だけが社会の不幸なシワ寄せに
我慢しなければならぬのか、という懐
疑が、やがて社会体制、大人たちへの反
発となり、大学に入って不満が発火点に
達した世界的なヤングパワーの潮流だと
して、この世代が、大学改革から社会に
出てきたときに、どういふ要求を社会体
制につきつけるか、いまの三十代、四十
代の先輩たちのように、体制に組み込ま
れて辛抱づよく努力する気風とは違い、
抵抗を感じるものは何でも手当り次第に
破壊し、革命していくエネルギーをぶっ
つけてくることは明かである。これに対
して社会が一体なにを準備できているの
か、といわれると全く寒心に耐えない。
若し、この波が、まともな教界に及んだ
としたら、果してどう受けとめることが
できるのか、学園紛争の次に来るものを

子測した対応こそ、教界再生の生命線で
はあるまいか。
対応には反省を
七〇年代への対応にとって、教界の徹
底した反省こそ不可欠の条件であること
は既にのべたが、厳しい分析、市広い研
究の積みあげと各宗団の協力によっての
み、七〇年代問題への対応が初めて可能
であるといえよう。
このほど、浄土真宗本願寺派（西本願
寺）宗務当局が同派宗報誌上に発表した
「宗門診断白書」は、今までどこも手が
けなかった。外部の専門家による宗門の
組織・機能、僧侶の士気・モラル・能力
全般にメスを入れたものとして、その勇
断は高く評価されてよいのではあるまい
か。
この宗門白書は、日本能率協会コンサ
ルタント岡田潔氏によるもので、問題点
のみを指摘するとして
①時代の急速な変化に対応できない宗
門の宗教活動、②現実の問題と遊離す
る因習的組織、③組織活動の欠除、④
旧体依然とした経営管理方式、⑤宗門
活動の大半を占める僧侶の士気の沈滞
と能力の低下、⑥宗門財政の逼迫によ

る宗門活動の不活発
の六点を挙げている。面接した末寺僧侶
の傾向は「一匹狼」的で、お互い同志は
不信感があり、教務所とか隣寺と手を結
ばず、各寺各寺がばらばらに、なんとか
やっていけるので自己保全に汲々として
相互に対立して活動しては困る。と
いい、「宗門」という組織の形はあるが、
果してその組織が宗門の隆盛のために手
を結んで一体化されているかどうか甚だ
疑問である。むしろ、これは逆になって
いる」と厳しく指摘しているが、四十代
の僧侶が立ち上れば大丈夫であると思
う」といっている。
門信徒会運動も六年以上たち、本山
も教務所も熱心にやったが、中味をつ
くらなければいけない。布教も殊ど大
部分は末寺個々を中心としたもので、
五〇〇程度の僧侶が兼職である。次の
時代の人々に対する布教方法、教義に
関する問題を急速に解決せねば将来に
大きな問題を残すことになると思う。
と警告し、各末寺の組織について
組内の寺で、あそこ、ここが布教
しているから、これを足し算して組
(そ)が布教活動しているといえるもの
ではない。組織する」とは、これと、
これとの足し算ではなく、それ以上の
大きな能力が発生しなければならぬ
もので、シナジー効果をつくりだす。
門末の教化不活発の原因として、本末関
係の不信感が大いこと、当局の画一的
な行政や、宗門行政への現地不参加、本
山中心主義への不満といったことが述べ
られている。
この打開策として、将来子測技術の導
入によって宗門の総合長期計画が必要と
なってくるが、各宗団とも目前の宗務行

政にのみウエイトを置きすぎていることへの反省が強く求められよう。
浄土宗知恩院発行の「おてつぎ叢書」

七百年御遠忌の時には総本山の諸堂が修築され、阿弥陀堂が建てられ、華頂女学校が建設されて二百万近い金が本山の基金として残された。この額を今の利息から逆算すると六億円に相当する。七百五十年（昭和三十六年）には集まった総額が五億円を切るもので、残った金は四千五、六百円、これが五十年間の教団の変化であり現実である。もう五十年たつたら、おつりも得られないのところがうだらうか、つまり教団自体が具体的な展開を忘れ、伝統と形式の上のみ生活していた。

という意味の敵しい自己反省を掲げている。この自己批判は西本願寺の宗門診断白書と共に心強い限りで、曹洞宗にも宗門白書を発表した記憶があり、今は人材育成など三本柱で宗団の充実に取り組んでいる。

宗門の経済基盤をゆるがす過疎過密

過疎・過密の問題にしても、宗門の経済基盤をゆるがす大問題として、どれだけの宗団がこれを真剣に掘りさげた討議と研究によって対応を検討されているか実情は明かではない。曹洞宗宗務庁が行った「宗勢総合調査報告」（昭40）によると、寺院一三、八五〇カ寺のうち八三・九%が農山村寺院で、都市寺院は一五%である。農村から都市への人口移動という大きな地すべりは宗団と末派寺院の現在の位置を崩壊しかねない大問題であることが、この一事をみて明かであり、

門末寺院の財政力の地盤沈下、青空寺院の統出（島根県下の本願寺派寺院）という事態も既に報道されている事実である。人口の移動増加率（昭35〜40年）が一五%以上の都市は一三三あり、そのうち主なものは東京、大阪、名古屋、札幌、広島などで、五〜一五%までは一三四都市で東海道の中小都市がこれに当たっている。人口減少都市は北海道、東北、北陸中国、九州、四国に多く、地域的には裏日本の都市の人口が減少し表日本の大阪より東京までの太平洋岸の都市が増加し都市人口の減少している地方は農村人口も減少している。

いわゆる東海道メガロポリス（巨首都市）への人口移動で、三十年後にはこの地方に一億人（全国人口の約八割）が住むことになり、曹洞宗でみると、同宗全寺院数の八・七%しかなく、都市化に対応して伝道活動を展開するにしても、これらの拡大する都市への開教が急がれる。二十年後は総人口の九〇%が都市に住む都市化時代をむかえたとみられるだけに、農業中心できた徳川時代からの伝統をそのまま墨守して、現在まで何ら改正の手も加えられずに来てしまった各宗団の教区制門末寺院の配置、別院・大本山の所在地一つをみても、急速度で変動する社会の変革には到底対応するのは困難。寺檀関係にのみ支えられてきた個々末寺に於ては、既に対応の能力も意志も欠落している寺院が多いといえよう。まだまだ生活に困窮を感じない現状から、あるいは、まだ何とかなるだろう程度に七〇年代問題を考えているとしたら、

教団の再生など望みうべくもあるまい。急激な都市化から生じる農村の過疎問題といい、ヤングパワーによる大学紛争

といい、戦後から現在にいたる社会分析の中に明解に跡づけられている問題であり、昨日、今日に起った突発的な現象でないことは確かである。

万国博から学びとろう

近く大阪で開催される万国博も、教界の前途に多くのものを示唆している。一例をあげると、富士パビリオンの建造物は、すでに各方面で紹介されているが、プラスチック製のパイプに空気を詰め込み、そのパイプを曲げてビッチリとすき間なく並べてつくった建物である。この発想を生み出したグループの代表は次のように語っている。

屋根とか壁とか床という従来の考えを一掃して二十一世紀に向けてわれわれの夢はふくらんでいる。月にだって建てられる可能性は充分です。二十一世紀に対する現実と夢と主張をこめてエキスポ70の会場で人類の可能性を競う。

このように万国博は来るべき時代を象徴し、将来のシステム化時代への手引となり、先導役を勤めるものとみることができよう。万国博をシステム々の具体化であるという観点から、これを他の分野に中広く延長し、拡大していくとき、教界も大きく関連する未来都市の建設、地域開発の新しい手法として、活用したり、政治、経済、社会の各方面の政策企画の立案、実行に適用する道を開くならば、万国博の功績は物量的に計りうる経済の波及効果よりも、はるかに大きいものを与えてくれるということになる。教界のなかに於ても、個々の宗団や個人には優秀な人材に恵まれていても、教界全体の協力や運営には熱が入りにくい

面がある。万国博のもつシステム意識はこのような教界の欠陥への反省として見直されてよいものをもっていると同時に既成の概念を超えて取組んだものであることは意義深い。

今迄の歴史や概念を打ち破った生きた組織として活動しているものとしてEECは活用されてよいのではあるまいか。ヨーロッパに於けるEEC（欧州共同市場）がフランス、西ドイツ、イタリア、ベネルクス（ベルギー・オランダ・ルクセンブルグ）というヨーロッパ大陸の中核をなす六カ国によって、西ヨーロッパに第二のルネッサンスとも云われる程の大きな変革をもたらしている。

このEECも長い生みの苦悩を経て今日にいたったもので、一九五七年三月二十五日イタリアのローマ、キャピトリオネ宮で調印された『ローマ条約』で、ユーラトム（原子力共同体）条約と、ヨーロッパ経済共同体条約の二つの条約を調印し、無期限で脱退の規定がないという特徴をもつて、運命共同体的な形のものに、めざましい統合の実績のうえに立つて、いっそう強固なものとなりつつある。関税同盟から経済同盟へ統合を達成し、経済的な繁栄をもちとるとともに究極的には「政治統合」の実現もねらっている。

加盟国のナショナル・インタレスト（国家利益）が角突き合わせるなかで、ローマ条約の精神が高められていることをみると、全仏という制度と機能を一段と發揮しうるための加盟団体の支援によって、七〇年代の激動を前に、全一仏教運動への道を進めるのでなくては、到底この対応は困難だといえるのではあるまいか。

仏教を世界のものへ

万国博もいよいよ開幕の運びとなった。ゲーンシャガルや、富士山日本のイメージで訪れる諸外国人はまさかあるまじいと思うけれど、新幹線や、エコノミックアニメルの日本だけを印象づけてしまったのでは残念である。日本固有の文化特に大乘仏教の花を咲かせた日本を少しでも感じとって貰いたいのは仏教徒の願である。仏教会は苦勞してささやかながら施設参加を試み、また、仏教案内書を作つて、少しでもその目的を果そうとして、国際仏教交流センターも巨額を投じて、これは可成本格的なガイドブックを編纂したり、英語仏教講座の開設を計画している。これらの努力にもかかわらず多くの外国人たちが、日本人の生活の中に仏教を見出し、またその思想が社会の指導力となつていくことを感じてくれるかどうか甚だ心もとない。博物館的、または観光的な存在としての仏教形態だけが印象づけられてしまふようである。

輪法転

仏教を

世界のものへ

十六世紀以来、世界は西欧思想によって支配され、非西欧国はむしろ自からの固有の文化を捨て去ることに努力してきた。日本もその例外ではない。西欧思想が世界を近代化し、機械化し、個人の権利を保障するなど、人類文化の向上に大きな貢献を与えてきたことはいうまでもない。しかし今日その否定面が集積されて人間疎外を招き、一歩誤れば人類そのものが壊滅するかも知れない危機をは

困窮のその王利富留望。をいふつらじつつある。だからといって、このまま放置することは許される筈はない。今や世界の心ある人々は現代及び未来の社会形成原理を打ち建てるために真摯な努力を払っている。そして東洋文化のなかにその原理を求めようとする風潮が近時非常に盛んになってきた。二十一世紀の初頭における世界人口は六十億を数えるだろうといわれているが、アジア及び太平洋諸国の人口が、その三分の二を占めることが予想されるとき、アジアの向背は人類の運命を左右することは間違いない。従つて東洋の研究、アジアへの関心の昂まるのは当然である。例をアメリカ

に取つて見ると、アメリカの財団数は約一万五千、年間の給付能力は三千億円といわれているが、ここ数年間にアジア研究のために投ぜられた金額は大変なものである。ロックフェラー・カネギー・フォード財団などは、それぞれ所謂地域研究プログラムを建て、徹底した非西欧地域研究に力を注いでいる。例えば、フォード財団はこの十年間に九八七人に対し一人平均三五〇万円を給与している。そして受益者中、五五〇人がアジア研究者として大学教官に就任し、その著書三七三冊、発表論文三〇〇〇に及ぶと報ぜられている。また米國政府もアジア諸国語を集中的に修得する教育プログラムを推進

し、一九五八年より六年間に一二〇億円の研究費を投じているし、地域研究センターに四億円、図書費に二五億円、地域研究学生に五八億円を、またフルブライト法、スミスリマンント法、フルブライト・ヘイズ法などで巨額を非西欧地域の研究に給付している。このように幕を閉じつつある西欧思想を新しく展開させるために特に東洋の研究に真剣な努力を払っているとき、その文化や思想のなかで中心をなしている仏教、しかもそのなかで指導的な地位にあると自負するわが国の仏教界が果して現状でいいのだといえるのだろうか。仏教諸団体のややもすれば形骸的な存在もさることながら、私は

が国の仏教学界の体質改善を強く要望したいと思う。例えば、さきに記したアメリカのアジア研究にしても戦前には少数の大

東京 → ジャカルタ (2泊) → ボロブドゥール (3泊) → バリ島 (2泊) → バンコック (2泊) → アンコールワット (2泊) → 香港 (1泊) → 東京

東南アジア旅行の決定版!!

ボロブドゥール・バリ島・アンコールワット 13日間の旅

◎ 5月16日(土)出発～5月28日(木)帰国

◎ 参加費用 ￥333,000

お問い合わせ、お申し込みは **ジェットエア サービス代理店**

仏蹟参拝専門の **株式会社 子代田トラベル**

東京都港区南青山5丁目6番20号(千成ビル)
電話 407-3612-3 郵便番号 107

現場

宗務庁・新聞布教 (2)

日蓮宗伝道部新聞課長

尾谷卓一

日蓮宗新聞の歴史

宗門経営の文書伝道紙が発行されたのはおそらく「日蓮主義」が最初であったと思われる。

もつともそれ以前に「日宗新報」とか「天鼓」とか「布教」など沢山の雑誌類のあったことを記憶しているが、いづれも個人経営でその主管の死亡や、その他の事情によって、大した長続きせずして消えていった。

この「日蓮主義」は、昭和二年、時の管長酒井日慎師と田中智学師のもとで生まれた。

ともかく大した意気込みと規模をともって画期的な事業として、この出版ははじめられたが、宗門ではその編集や経営について自信がなかったものらしく、一切を国柱会に依託して作ってもらうという方法だった。いかにも立派な画期的宗門伝道機関紙は生まれたが、それはあまりにも国柱会色の多いものがあつた。

そこで内部にいろいろと批判の声があがり、かつ、宗門の名において発行する雑誌を、そっくり、他の者に依託するのは宗門の活券にもかかわるといので、昭和三年の正月号から宗門独自で編集経営することになった。やってみれば、宗門には相当の適材が

あり、国柱会色を一掃して面目を一新した。しかし頒布方法が強制的で、もし誌料の滞納があれば宗費に準じて書類は通さぬという強行方針であった。これでは雑誌の質や内容は問題でなく、ただアラを探しケチをつけるようになる。現に相当の大山では、毎月送られる「日蓮主義」を配布するに由なく、裏堂に山と積まれているところもあつたと聞いたが、ともかく機関紙としての大事な役割りを果たしてきたことはたしかである。

しかしこの「日蓮主義」も、昭和十九年には、用紙不足のため十四頁をもって終刊となつてしまつた。直接日蓮宗新聞に関係のない「日蓮主義」について、かなりのスペースをさいたのは、日蓮宗新聞の前身を語るとなるとどうしてもこれにふれなければならないと考えてのことなのでご了解いただきたい。

こうして迎えた終戦、浅草のバラック同様の宗務院庁舎において、農地開放の痛手を受けた寺院経済を、なんとか建直すべく、中西本秀教学部長のもとで考えられたのが「護持会」であり、この制度をアピールし徹底する機関として「護持教報」が企画され、その第一号が昭和二十五年一月に発行された。これが昭和二十九年の四月から、「日蓮宗新聞」と改

められ、紙面をタブロイド版に拡大、発行日も月三回とし、第三種郵便物の認可を得、陣容をととのえるにいたつたのである。私が宗務院に奉職するようになったのは、こうした体制が確立された昭和三十一年の六月だが、それまで二十年ちかくも「日蓮主義や護持教報」の出版に努力してきた先輩の高橋玄浄師は、その内幕について「私事をバクロするようで恐れ入るが、これまでの宗務院の悪いくせはあるいは坊さんの世間しらずかも知れないが、出版の企画をした場合、印刷費や郵税費などは予算に盛るが、原稿料や雑費等は一切苦勞なした。私も部長達と友人の関係上、頼む」と言われ「うん」と承知はしたものの、宗務院から一片の辞令も貰わず、一銭の原稿謝礼も、雑費も貰わず、ただ友人関係として始まつたまま今日まで来たんですよ」と語つてくれた。無冠の帝王も、ひどい冷遇で甘んじてきたものである。

先輩の話によると護持教報が日蓮宗新聞に改められたのは、護持という言葉の持つ守勢から脱皮し、日蓮宗の真価を内外に打ち出すという積極的な意味を持たせるためだといふ。

実際護持教報の時にはお説教調の内容が多かつたのに対し、日蓮宗新聞になつてからは、速報性と指導性が強調されるようになり、護法運動の推進、そして日蓮聖人降誕七五十年を迎えるにあたり使命の重大さが改めて認識され、紙面の向上、部数の飛躍的增加に加え、経済的にも採算がとれるように生長した。「だんだんよくなるホッケ太鼓といったところか。

太平洋諸島戦没者慰霊祭開催

(梅友会第一回全国大会)

挙 行 各 種 昭 和 46 年 2 月 第 2 週 予 定 10 日 間
訪 問 地 各 種 沖 繩 ・ グ ァ ム ・ サ イ パ ン ・ ハ ワ イ

旅行のお世話は近畿日本ツーリストが行います くわしくはパンフレットにて

連絡先 ☎ 460 名古屋市中区大須三丁目39番33号

TEL ナゴヤ <052>241-0901・1920

法衣・装束・神具 梅金商店内 梅友会事務局 幹事 山田二三雄
贈答用記念品

言論の自由妨害に関する談話

わが国の工業生産の躍進はめざましく、とくに念願の国産衛星の打上げに成功するなど誠に輝やかしい歩みをつづけている。

六十年代は生産第一主義におされて尊厳なるべき人間性が没却されてきたが、最近ようやく人間性回復のめざめが各界におこりつつあり、七十年代こそ「心の時代」として宗教界に期待される重大なるこの秋にあたり、憲法第二十条の「信教の自由」を危くするような言論の自由妨害問題が創価学会・公明党によってなされてきたという報道を聞くと、われわれは重大なる関心をもって重視せざるをえない。

全仏教徒は、この機縁を生かし徹底した自己反省を行なわなければならないと共に、今後再びこのような不祥事を繰返すことのないよう、関係当事者においては社会の期待に応える措置がなされる事を祈念して止まないものである。

昭和四十五年三月

財団法人 全日本仏教会



表紙のお寺

浄土宗三寶寺。

文祿・天正年間の創建。

弘仁二年諸国に悪疫が流行し勅命で空海が十六軀の薬師を刻み、六十六ヶ国に安置祈願した。その時武蔵国の寺に安置したのが当寺の本尊といわれる。現在の本堂は、大震災と今次大戦と二回被災し、三十九年に復興。横浜市神奈川区台町七六・住職吉水瑞順師。

宗派仏団体人事(就任)

真宗大谷派

宗務総長 名畑 応順
参 務 鷲山 五男
中山 尊照
豊原 勝友
福島 昭信
鳥越 玄寿

法華宗(陣門流)

宗務総長 水本 大岳
総務部長 鈴木 昭吾
教化 山岸 観成
牧野 琢弘
星川 恒雄

埼玉県仏教会

電話番号変更〇四八八(六)一三二三八
東京本願寺 輪 番 伊藤 哲雄

真言宗

宗 務 長 蓮生 善隆
阿部 本宣

曹洞宗

宗 務 長 岩本 勝俊

井上恵行師に 紫綬褒章

井上恵行師(元文部省宗務課・法学博士)は、「宗教法人法の基礎的研究」出版、多年の宗教法制の研究により紫綬褒章を受けられた。この祝賀会が実行委員会によって三月七日(土)午後五時より学生会館で開催された。

全仏

臨時理事会を開催

去る二月十八日京都東本願寺第二会議室で臨時理事会を開催し次の事項について協議した。
● 法輪閣落慶式執行について

「法輪閣」建設経過報告を行ない、落慶式々次第等を承認。
● 世界宗教者平和会議につ

● 全仏よりのメンバーについて承認。
● 理事長辞任について

米馬道断理事長病氣入院のため辞任を了承。後任について選考委員をえらび、同委員会に一任。結果、鶴岡隆玄理事後任稲田稔界全仏事務総長を全員一致で理事長に選出した。

● 「言論出版の自由妨害に関する談話」について
下川理事の意見により、原案を一部修正して、対外に談話として発表する。(詳しくは、本を参照。)

春季慰霊大法要 執行される

財団法人東京都慰霊協会(会長長美濃部亮吉氏)では、例年の如く、都内戦災殉難者、大正大震災遭難者春季慰霊大法要を、導師真言宗豊山派護国寺貫主小林良弘大僧正のもと三月十日午前十時より東京都慰霊堂で執行される。

交通安全

「いのちを大切に」
のステッカー製作

人命軽視の風潮を打破するため、東西両本願寺、浄土宗が一体となり、その対策の一端として本願寺派東京教区青年僧侶協議会(理事長石上慈敬師)では、「いのちを大切に」のステッカーとして製作し、一枚百円(原価六十五円)で、その普及に全力を

あげその純益は、このよう運動推進につとめる各関係者へ寄付し、役立てることになっていく。又長岡市仏教会(会長井上憲司師)では、すでに昭和四十二年より行なっている。

「おわび」

「全仏」二月号の表紙・見出し中、静岡市感応寺とあるのは横浜市三寶寺の誤植、裏表紙説明「表紙のお寺」は間違いに付訂正し深くおわび申し上げます。なお、全仏三月号に改めて掲載いたしますのでよろしく御了承下さい。 編集人

天台の秘宝展

無事終了

参観者約十万人

天台宗祖伝教大師の一千百五十年大遠忌事業の一環として、東京新宿小田急デパート十一階催場で、去る二月十七日より三月三日まで開催され、参観者は十万人をこえ成功裡に終った。この期間中天台宗で推進している「一隅を照らす運動」の会員募集を行ったが、これに加入したものは期間中に、三百四十人の積極的入会者があった。



昭和四十五年三月一日発行
三月号 第一五五号
発行人 伊藤勝淳
編集人 柳了堅

発行所財団法人 全日本仏教会